さくら

美空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
さくら

【Ｎコード】
Ｎ６１０６Ｚ

【作者名】
美空

【あらすじ】
新一がいなくなって１０年の季節がながれた。蘭は教師になって帝丹高校に通うことに。そこでみた１本の大きな桜。その桜は新一とのある約束があって・・・。

プロローグ

きみの優しさ。
きみのはじけるような笑顔。
きみの声。
きみがかけてくれた言葉。
きみと過ごしたとき。
きみとの思い出。
１０年たっても忘れられないきみの存在。

あれからいくつもの季節がながれた。
きみがあたえてくれたこの想い。

ゆれておちそうになった。
あきらめようとした。
もう無理だとおもった。

それでもあきらめきれなかった。
それだけ本気で想っていたから。

きみのおもかげを追っている。
きみは今どこにいるのだろう。

きみに会いたい。

出会いと別れの季節

春
それは出会いの季節でもあり、別れの季節でもある。

わたしはある高校の前に立っていた。
そこはすごく思い出があってなつかしい場所。
それと同時に、思い出がありすぎて逆にかなしくなる場所。
今日からわたしは、帝丹高校校で教師として通うことになる。
１０年前はあの子たちのように胸いっぱいにふくらませながら、制服に身をつつんで通っていた。
そして今は、スーツを着て校門のまえにたっている。

ここにはいろんなことがあった。
新一といっしょに登校したり、授業中にねている新一をたたきおこしたり、たまにけんかしたり・・・。
ほんと、どれもこれも新一との思い出ばかりだ。
けれどもあなたはもういない。
１０年前、突然すがたをけしたのだ。
たまに電話もくれたけどいつからかその電話もプツリッと途絶えてしまった。
それから新一との関係もあの電話のように途絶えてしまったのである。

それでもわたしは待ちつづける。
あなたが帰ってくることを。
また笑顔でそばにいてくれることを。
「蘭」とよんでくれることを。

わたしは一歩ふみだして校門をくぐった。

久しぶりの再会

「蘭お姉さん」
ふりかえるとそこには、歩美ちゃん元太くん光彦君くんの三人がいた。
１０年前は小学一年だった彼らは、今はもうりっぱなお姉さんお兄さんへと成長していた。
「ひさしぶりだね。三人ともすっかり成長して」
なつかしそうにほほえむわたし。
歩美ちゃんたちにあうのは１０年ぶりだ。
そう、１０年前は少年探偵団としてよく事件にくびをつっこんでいた。
家にもよく遊びにきたり。
でもあることがおきてからは彼らとは関わりがなくなった。
そう、たしかそれは・・・。

「コナンくんはどうですか」
光彦くんからの突然の質問にかたまってしまう。
コナンくん・・・。
コナンくんは１０年前、わたしの家であずかっていた。
でもしばらくすると両親がむかえにこられ外国でくらしている。
たまに手紙ももらっていたけどいつのひかその手紙もプツリッとこなくなった。
そう、コナンくんが外国にいってから歩美ちゃんたちとも会わなくなったのだ。

「コナンくんは最近、手紙もこなくなってしまったんだよ」
「そうですか」
がっかりとした様子でおちこむ彼ら。

気持ちはわかるかもしれない。
わたしも新一からの連絡が途絶えている。
しかもコナンくんの手紙がこなくなったのとほぼ同時に。

コナンくん・・・。
いまでもときどき思ってしまう。
コナンくんが新一だったらよかったのに。
わたしがないているときコナンくんはささえてくれた。
新一みたいに。
それがすごくあたたかくて心配している気持ちがよくつたわって。
コナンくんがいたから新一のこと待ちつづけれたんだよ。
でもコナンくんがいなくなって急によわくなってしまった。
あきらめようともおもった。
でもコナンくんがいってくれたから。
「新一兄ちゃんいってたよ。いつか絶対に死んでももどってくるから。だからそれまで蘭にまっててほしいんだって」
あの言葉があったから。
だから新一をまちつづけれる。
ばかだなわたし。
コナンくんはコナンくんで新一は新一なのにね。

「蘭お姉ちゃんもういかないと始業式はじまるぜ」
元太くんの言葉にはっとしたわたしは時計をみた。
やばい、はじまっちゃう。
「だいじょうぶ？ボーとして」
歩美ちゃんからの心配そうな声。
だめだなわたし、今日から教師をするっていうのに生徒に心配かけちゃって。
「うんだいじょうぶ。いこっか」
元気な声で答えたわたしは歩きはじめた。

スタート地点

始業式も終わりわたしは、今日から担任となるクラスへはいろうとした。

二年Ｂ組
今日からここがわたしが担当する教室になる。
不安だな。
うまくやっていけるかな。
そんな思いをのみこみドアを開ける。

ガラガラガラ

はいるといっせいに視線がわたしのほうにむく。
おもわず目をつぶってしまう。
教卓までくるとつぶっていた目をそーとあけて周りを見る。
そして息を大きくすいこんで。
「きょっ・・・今日から・・・みなさんの・・・担任となる・・・
毛利蘭です。・・・よっよろしく・・・お願いします」
心臓がドキドキしてすごく緊張していった言葉。
クラスが笑いにつつみこまれる。
「毛利先生緊張しすぎ」
生徒からいわれた言葉。
最初から失敗しちゃった。
こんなんで教師やっていけるかな。
不安にうめつくされてわたしの新しい教師ライフがスタートした。

桜の樹

授業が終わりわたしはみんなよりひとあしはやく帰ることにした。
部活がおわり帰ろうとしている生徒がいた。
なんかつかれたな。
はじめての授業ですっごく緊張した。
わたしは国語科の教師だ。
国語は昔から得意の科目でもあったから。
そんなことを思いながら歩いているとあるものを見つけた。

桜の樹。

そう、見つけたのは一本の桜の樹。
その樹はおおきくて立派に咲いていていた。
そしてうすいピンク色がかかった桜の花びらを全体にいろあざやかにつけていた。

たしかこの樹は・・・。

そんな桜の樹をみながらあることを思い出していた。

桜の樹と一つの約束（前書き）

蘭の過去のはなしです。

桜の樹と一つの約束

それはわたしがまだ高校一年生になったばかりの日のこと。
その日はちょうど入学式が終わって新一と帰るところだった。

「新一、入学式のときほとんどねてたでしょ」
「べつにいいじゃねーか。つまんなかったし」
「よくないよ。大切な入学式のときにねるなんて」
そんなやりとりをしていると体育館のとなりに一本の桜の樹をみつけた。

その樹は大きくて、りりしくて、堂々としてて、立派に立ってた。
そしてあざやかな桜の花びらをたくさんつけてて。

「ねえ新一あの樹のところにいこうよ」
そういって胸を弾ませながら走るわたしに
「まてってば」
と新一はわたしのうしろを追いかけてた。

ちかくまでくると遠くからみてたのと全然ちがってすごく迫力があった。
「蘭」
やっと追いついてきた新一に桜の樹をみながらいう。
「すごくきれいだいね」
「あー」
新一も目を細くして桜の樹をみていた。
ほんときれいだな。

「ねえ新一」
突然の言葉にくびをかしげる新一。
「再来年、卒業したときにまた二人でこようよ」
また卒業したときにこの桜をみてみたい。
大きくて立派に立つこの桜の樹をみて思った。
「ああ、いいぜ」
「じゃあ、帰ろうか」

こうして新一とかわした約束。
でもこの約束が果たされることはなかった。

博士の家で……（前書き）

もとの時間にもどります。

博士の家で……

ふーっ。

家に帰って一息ついた。

そろそろ夕方だ。

今日はお父さんが町内会の旅行で家にはわたしだけだ。

なんか作る気もしないからコンビに弁当ですませようかな。

そうおもって近くのコンビにでかけることにした。

コンビにについた。

「蘭くんじゃないか」

おじいさんみたいな声がしてまさかとおもって後ろをふりかえる。

「阿笠博士」

ふりかえったさきには新一のとなりの家に住んでいる阿笠博士がいた。

「ひさしぶりじゃな」

「うん」

博士とは新一がいなくなっても新一の家にそうじするときに、ついでに博士の家によることがある。

最近はそうじにいってないので会うのは一ヶ月ぶりくらいだろうか。

「今日はどうしたんじゃ」

「弁当買いにきました」

「めずらしいな蘭くんが……」

「今日は一人なので」

するとあることが頭にうかんだ。

「そうだ。よかったらいっしょに食べませんか？」

「おう、それはいいのう」

博士も賛成してくれた。

「じゃあわたし、家から材料もってきますね」

こうして博士の家で食事をすることになった。

「おじゃまします」

「おういらっしゃい」
博士の家はかなりおおきな家だ。
新一の家にはまけるけど……。
「じゃあ、すぐできるのでまっててください」
そういうとエプロンをきてつくりはじめた。

「めしあがれ」
「おう、うまそうじゃな」
今日作ったのはシチューだ。
「いただきます」
博士がおおきな口でひとくち食べた。
「どうですか？」
おそるおそるきくと
「おいしいのー」
と答えてくれてわたしはぱっと笑顔になった。

「じゃあわたしも、いただきま……」

食べようとするとある写真が目にはいった。

コナンくん……

そこには十年前、博士と少年探偵団

そしてコナンくんと哀ちゃんがうつっていた。

さっきまでの笑顔もきえて、しばらくかたまってしまう。

「蘭くん……」

「ねえ博士。コナンくんはいまどうしているのか分かりますか？」

分からんのじゃ」

博士は悲しそうな顔でいった。

「そうですか。じゃあ食べましょう」

博士に心配かけるわけにもいかないから笑顔でいった。

（すまんのー蘭くん、うそをついてしまって）

と博士が思っていることに蘭は気づかなかった。

駅前のカフェで…

「毛利先生」

名前をよばれてふりかえる。

「本田先生」

本田先生はわたしと同じで、今年から帝丹高校の教師になった。

本田先生は授業がわかりやすくておもしろいから、

男女両方の生徒からも人気がある。

だから先生のほうでも本田先生の評判はよく信頼されているのだ。

「あのー、よかったら今度お茶でも…」

「え！いいですよ」

「じゃあ今度の日曜日の十時に駅前のカフェで…」

「はい」

こうして今度の日曜日本田先生とお茶にすることになった。

まさかこのときはあんなことがおきるなんて思わず…

そして今日が日曜日。
駅前につくとすでに本田先生がきていた。
「すいません、またしちゃって」
あやまるわたし。
「いっ…いえ、おれも今きましたから」
本田先生は笑っていってくれた。
「じゃっじゃあ…いきましょうか」
ぎこちなく言う本田先生に微笑ながら返事したわたしは、
カフェにはいっていった。

「毛利先生はなにがいいですか」

メニューをじーっと見ながらきく本田先生。

「じぁっ…じゃあコーヒーで」

なんとなく目に入ったのがコーヒーだったから、
コーヒーを注文することにした。

「気が合いますね。俺もコーヒーにしようと思ったんですよ」

すると本田先生は店員さんにコーヒーを三つ注文した。

コーヒーがくると本田先生は一口のんで突然真剣な目になった。

つられてわたしも顔がひきしまってしまう。

「あっあの…実は俺始業式であったときから…
毛利先生にひとめぼれしてしまって…」
「ょっ…よかったら…つきあってくれませんか」
えっ！
とつぜんの言葉にとまどうわたし。
「あっ、返事はまた今度…」
「ごめんなさい」
「わたし、本田先生の気持ちにはこたえれません」
「どっ…どうしてですか」
汗をかきながら机に手をつきわたしのほうを見る。
「わたし、好きな人がいるんです。
でもその人はどこにいるかわからなくて、
１０年待っても帰ってこないんですけどね」
気づいたら新一のことをはなしていた。
しゃべればしゃべるほどとまらなくて。
「なんでだよ」

突然本田先生がどなりだした。

「なんで、そんなに待たし続けるやつを待っていられるんだよ。
毛利先生のことなんかなんにも想ってないかもししれないじゃん」
十年も待たし続ける人間としてどうかなっとるよ」

ズキン…

本田先生の言葉に胸がいたむ。

ナンニモオモッテナイカモシレナイ

「毛利先生はよくそんなやつを待っていられますね」

「やめてください」

「あいつの…新一の悪口いうのはやめてください」

気づいたら口にでていた。

でももう止められなかった。

「確かに…新一は…わたしの…こと…なんか…なんにも…想ってないかも…しれ…ない。

でも…好きだから…あいつのことが…好きだから…だから…わたしは…新一のことを
待ち続ける。
たとえ…新一が…ほかに…好きな人が…いるとしても。
ちゃんと…『お帰り』っていいたいから。」

涙があふれだした。

止めようとおもっても止められなかった。

久しぶりだ。

久しぶりに自分の気持ちを他人にぶつけられた。

コナンくんがいなくなっていらいかもね。

「蘭」

えっ

この声まさか…。

「し…ん…い…ち」

ふりむくとそこには新一がいた。

駅前のカフェで…（後書き）

ずいぶん急展開しちゃいました（笑）

残りもあとわずかだけどがんばります。

再会

「蘭」

「し…ん…い…ち」

なんで新一がここに…。

一瞬、今の状況に理解できなかった。

わたしは夢でも見ているのだろうか。

新一がなんでここにいるのか…。

理解できなかった。

「蘭」

もう一度名前を呼ばれると夢なんかじゃないって思えてきた。

「しっ…しんいちぃ」

わたしはいきおいよく新一のもとにむかって走り出した。

そしてそのまま新一の胸のなかにとびこんだ。

新一はそっとだきしめてくれた。

あったかい…。

新一の胸の中はあったかく、
今までの気持ちがじわーっととけていくのを感じた。

「ばかっ…ばかばかばか」
「おそいよ、何年待たせたと思ってるの」

「ごめん、事件が長びいちまって」

「事件事件事件って、どんだけ事件が好きなの？」
「わたし、たくさん苦しんだよ。悲しんだよ」
「それなのに、なんで電話の一つもくれなかったの？」

ひとつひとつの想いが言葉になっていく。

わたしこの十年のなかでこんなに苦しんでいたなんて。

このとき初めて気づいた。

「ごめん…」

新一の“ごめん”がすっごく哀しく聞こえた。

ああ…そうだ。
わたしだけが苦しんでたんじゃないんだ。
きっと新一も同じように苦しんでいたんだ。
するとふいにいままでの気持ちが軽くなっていった。

「もういいよ」
「新一がちゃんと帰ってきてくれたから」
「蘭、あのさ…」
新一は、わたしの耳元に近づいた。

「ただいま」

あっ…。

「おかえり」

おかえり、新一。

行きたい場所

「あのー、毛利先生」

「あっ、本田先生」

「その人がしんいちっていう人なんですね」

「はい」

「よかったですね」

「ありがとうございます」

礼をするとコーヒーの代金をおいて
新一といっしょにカフェを出た。

いっしょに歩いていると本当に新一が帰ってきたんだなーって実感してしまう。

「ねぇ、新一」
「いつから見ていたの？」

「あー…『お帰りっていいたいから』っていうあたりだよ」

ほっ…

とりあえずあの言葉は聞かれてないんだ。

「でもよくわかったね。
わたしがあの店にいるって」

「最初は蘭の家にいったんだけどよ、
だれもいなくて…
探しとったら偶然、蘭とさっきの男の人を見つけたんだよ」

「そうだったんだ…」

「なあ、蘭。
ちょっといきてーところがあるんだけど…」

「えっ、どこに？」

「ついてくればわかる」

腕をひっぱられながら新一についていった。

ついた場所は帝丹高校。

「新一が行きたかった場所ってここなの？」

「あー、
まあ、本当にいきたかった場所はもうちょっとさきにあるけどな」

新一はそういって校門をくぐった。

「まってよ」

そういいながらわたしは新一のあとを追いかけた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6106z/

さくら

2012年1月14日12時51分発行